

「小さな群れよ、恐れるな」

(ルカによる福音書 12:32-40)

ルカによる福音書 9 章に始まった、主イエスのエルサレムへの旅が進むにつれ、弟子たちは今後のことを心配し、恐れを感じ始めています。師匠の立場のみならず自分たちの立場も危うくなるかもしれない。恐怖が段々と大きくなってきています。その弟子たちに向かって、主は「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」と言われます。神の国こそわたしたちの目的地です。しかし目的地は分かっているにもかかわらず道がそれてしまうのが人間の弱さ、罪深さというものです。「あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心がある」と主イエスは言われますが、どうしても人間は保証を求め、目に見える富に心を注いでしまいます。先週の福音で「愚か者」とされた人もそうでした。「目をさましていなさい」と言われても、目を覚ましていることなど人間にはできないのです。しかし、主イエスはその人間の弱さを心底ご存知でした。だからこそ今日も、たとえ話によって弟子たちに神の国を明らかにします。そこに希望、喜びがあるから、恐れなくても大丈夫だと伝えたいのです。

今日のたとえ話の後半。主人自らが腰に帯をしめ、僕たちを席に着かせ、そばに来て給仕をします。この食卓こそ、来るべき神の国の光景です。主の給仕のもとで真の喜びに与るこの食卓のなんとすばらしいことか。もしも主人が必ず帰ってくるとわかっているなら、さらに、その主人が帰ってきたときには最高の食事が待っているということを確認していたなら…その帰りが待ち遠しくてしかたがないはずです。神こそこの主人です。神ご自身がこの喜びの時を用意し、約束してくれている。だから「恐れるな」と、主イエスは言うのです。

今日の福音。目を覚ましていなさい、というだけなら、それはただ厳しい義務を課されているようにしか感じられないかもしれません。しかし、主イエスは同時にその先の喜び、希望を示してくださいました。「小さな群れよ、恐れるな」という力強い励ましの言葉の裏には、神にある喜びへの確信があるのです。